

紹介「ドイツ史研究所（ロンドン）」

岩 野 弘 一

ナッシュ・ビルディング（ブルームスベリー17番地）は、美しく復原され、クリスマスの2、3週間前〔1982年12月2日〕にグロスター公をむかえて正式に開館した。それ以来、この建物は、“第2ドイツ大使館”のニックネームを頂戴している。というのは、ここには the German Academic Exchange Service (DAAD) のロンドン・オフィス、the Anglo-German Foundation for the Study of Industrial Society および the Anglo-German Association が含まれており、とりわけ、精力的な活動が続けているモムゼン所長の下で、すでに手狭になったラッセル・スクエアの研究所からぬけ出そうとしていたドイツ史研究所 the German Historical Institute London にここがハウスを提供したからである (The Economist)。実は、私が長期在外研究の機会を与えられてロンドンの地でそれを始めたのは、このドイツ史研究所である。理由は明解、大学院生の時代にふれた『マックス・ヴェーバーとドイツ政治、1890—1920』の著者モムゼン教授がそこにいたからであった。それはさておき、この機会に、わが国ではまだあまり知られていない、この研究所の紹介をしておきたいと考えます。ナッシュ・ビルディングは、大英博物館の斜め前にあり、内部は静かな落ち着いた雰囲気が漂うライブラリィ、美しく彩色された装飾天井、垂れさがる眩いばかりのシャンデリアの下、同時通訳付きのコンファレンスが開かれる会議室（ともに2階）、そして1階には受付とイギリス関係図書、地下は主として雑誌、3階は所長はじめとする研究員の部屋と秘書室などから研究所は構成されている。以下、研究所発行の案内パンフレットに忠実に、それに最近の具体的活動内容をつけ加える形で紹介を試みることにしたい。

ドイツ史研究所（ロンドン）の設立

ドイツ史研究所 ロンドン the German Historical Institute London (GHI

London) は、百年前にプロイセン政府によって当時新たに公開されたヴァチカン公文書の研究を助けるためにローマに the Instituto Storico Germanico が設立されて以降、この種のものとしては第三番目のものである。第二番目はパリの the Institut Historique Allemand で、約10年前にフランスとドイツの相互理解の深まりのしるしとして設立された。GHI London の歴史は、ハノーヴァーの the Archives of Lower Saxony の館長・カール・ハーゼ博士(Dr. Carl Haase) がロンドンにドイツ史研究所を設立すべく呼びかけの回状をドイツ人の歴史研究者の間に回わした年、すなわち1968年にさかのぼる。いく人かのドイツ人研究者特にイギリス史に関心のある者がこの考えに賛同し、そしてイギリス人の研究仲間と接触をもった。彼らもこのプランにおしめない支持を与えた。彼らは一緒になって、後に the Anglo-German Group of Historians として知られるようになったものの土台を築いた。フォルクスワーゲン財団の寛大な援助のおかげで、年次コンファレンスがもたれ、イギリス人およびドイツ人の大学院生に奨学金が付与され、そして1973年にはチャンセリィ・レーンに小さな連絡事務室が設けられた。しかしながら彼らの主な目的は、一層恒久的な体制へと道をつけることにあった。連邦研究技術省は、ローマとパリの歴史研究所と同じように機能するドイツ・センターをロンドンにという構想に好意を寄せた。そのような好意は示されたものの、ドイツ政府に、この目的に必要な基金を与えることは価値があると確信させるまでには若干の時間がかかった。事実、ロンドンのドイツ史研究所は、両国の歴史に特別な関心をもつドイツとイギリスの歴史家によって構成される一つの登録団体であるイギリスドイツ歴史家サークル促進協会 thh Verein zur Förderung des Britisch-Deutschen Historikerkreises (Anglo-German Group of Historians) によって運営される一つの私的な組織として設立されることが決定された。GHI London は、公式には1976年11月4日にオープンした。ちなみに、開所式の式次第および引続いてもたれた Aspects of Anglo-German Relations through the Centuries と題するコンファレンスの内容は、初代所長ポール・クルケとペーター・アルターの編集で印刷されており、入手可能である。ラッセル・ス

クェア42番地の研究所の新オフィスは、1978年2月7日にオープンした。ブルームスベリー・スクェア17番地の現在の研究所は、1982年12月2日にオープンした。3時のお茶を用意してくれるジョン・ルプトンさんの話では、サッチャー政府が空屋の国有財産を売却する方針にでて、それをフォルクスワーゲン財団が100万ポンドで買い、さらに改修費200万ポンドを投入して出来たのがこの研究所だそうである。

組織と運営

現在の所長(1977年より)は、デュセルドルフ大学教授のヴォルフガング・モムゼン博士(Wolfgang J. Mommsen)である。モムゼン所長は、1930年、マールブルク生れで、あのローマ史の碩学テオドル・モムゼンの曾孫であり、ハンス・モムゼンとは双生の兄弟である。主としてT.シーダーの指導の下で、ファシズム前史の研究からマックス・ウェーバーの政治思想に関する学位論文(前掲)を1959年に発表し、1964年のウェーバー生誕百年記念の第15回ドイツ社会学会大会で有名な「ハイデルベクの嵐」を起こし、さらに今次の「ウェーバー・ルネッサンス」の中心であるばかりでなく、西ドイツ歴史学界において、歴史主義の彼方に歴史的社会科学としての歴史学の構築めざす旗手として、ヴェーラー、ヴィンクラー、コッカと共に注目されているヒストリアンであることは周知のとおりである。目下の研究スタッフは、イギリスおよびコモンウェルスの歴史と英独関係の研究に従事する7名の研究員〔歴史研究者〕で構成されている。私の滞英中のスタッフはモムゼン教授の以外には次のような人々であった。

スタッフ

Peter Alter, Stig Förster, Josef Foscith, Kaspar von Greyerz,
Gerhard Hirschfeld, Hans-Gerhard Husung, Lothar Kettenacker,
Jürgen Osterhammel.

なお、スタッフの研究分野については、さしあたり刊行物の項を参照されたい。そこに名前が見られない者のうち、Josef Foscith は, Britische Deutschlandpolitik zwischen Jalta und Potsdam, in: Vierteljahrshefte für

Zeitgeschichte 30 (1982), pp. 675—714 など, Jürgen Osterhammel は, Britischer Imperialismus im Fernen Osten. Strukturen der Durchdringung und einheimischer Widerstand auf dem chinesischen Markt 1932—1937 (Chinathemen, 10), Bochum, Studienverlag Brockmeyer 1983. 631 pp. などをもっている。なお, Osterhammel 氏には, 滞英中の御好意に対して, この場をかりて, 謝意を表しておきたい。

彼らには, 最終的にはドイツの大学で教職につくことが期待されている。ドイツおよびイギリスの歴史家の両者をもって構成される諮問委員会 (the Anglo-German Group of Historians によって選出される) が, アカデミックな事柄についてのすべての決定にあずかる。GHI London は, the Max-Planck-Gesellschaft, the German Academic Exchange Service (DAAD) および the Goethe Institutes がもっていると同等の法的地位 (すなわち, 政府の直接のコントロールから自由である) を享受している。運営費は全額政府によって支出されていることは言うまでもない。なお, 7名のヒストリアンの外に司書, 翻訳者, 秘書および受付等のスタッフがおり, 合計で15名になる。私の最初に訪問した年の受付は, アンジェラ (Dr. Angela Davies) でカフカの研究で学位を得ており, この研究所の権威の象徴だとジョークを言ったものである。

活動内容

GHI London は, 特にイギリス, ドイツおよびコモンウェルスの歴史と国際政治との関連における英独関係史に焦点を合わせる近・現代史研究のセンターである。研究所は, イギリスとドイツの歴史家の間の学問的協力を助ける。研究所の研究プログラムにとって, 比較研究は不可欠の部分である。ドイツ史に関心をよせる歴史研究者のために, GHI London は, 研究施設特に研究図書館を提供する。そこで, 研究者はドイツでの歴史研究の最近の傾向についての情報に容易に接することができる。GHI London は, ドイツ史およびイギリス史あるいはそれに関連する問題についてのセミナーと講演を定期的に, そしてシンポジウムを不定期に計画している。セミナーは, 通常学期期間中の第2火曜日 (午後4時30分開始) にもたれる。誰でも参加でき, 無料である。

近年のセミナーとシンポジウムは次の通りである。なお、年次講演については、刊行物の項を参照されたい。

Seminar

SPRING TERM 1983

- | | |
|--------------------|--|
| Tues., 1 February | PROFESSOR R. HARRISON/Warwick
The New Utilitarians? |
| Tues., 22 February | PROFESSOR H. MOMMSEN/Bochum
The National Socialist Seizure of Power in 1933 |
| Tues., 1 March | PROFESSOR H. MÖLLER/Erlangen
Prussia in Weimar Germany |

SUMMER TERM 1983

- | | |
|-----------------|---|
| Tues., 26 April | PROFESSOR ALLAN MITCHELL/San Diego
and Grenoble
The Perils of Comparative History. France and
Germany after 1870 |
| Tues., 3 May | PROFESSOR VOLKER BERGHAHN/
Warwick
French and German Heavy Industry and the
Origin of the European Coal and Steel Com-
munity in 1951 |
| Tues., 24 May | PROFESSOR VOLKER PRESS/Tübingen
The Estate System in Germany in the 16 th
and 17 th Centuries |
| Tues., 31 May | PROFESSOR KONRAD JARAUSCH/
Columbia and Göttingen
Academic Illiberalism. Students, Culture and
Politics in Imperial Germany |
| Tues., 7 June | PROFESSOR KLAUS MÜLLER/Düsseldorf
The Rhineland and the French Revolution |

AUTUMN TERM 1983

- | | |
|---------------------|---|
| Thurs., 10 November | PROFESSOR EBERHARD JÄCKEL/Stuttgart
Decision-Making National Socialist Germany |
|---------------------|---|

- and the Holocaust
- Tues., 15 November DR. LEONORE DAVIDOFF/Essex
Domesticity and Enterprise in the English
Middle Class 1780—1850; “Our family is a
little world”
- Tues., 13 December PROFESSOR WILHELM HENNIS/Freiburg
Personality and Life-Orders. Max Weber’s
“theme”

SPRING TERM 1984

- Tues., 24 January PROFESSOR GÜNTER GRÜNTAL/
Karlsruhe
Government and Parliament in Prussia, 1848—
1866
- Tues., 31 January PROFESSOR GUSTAV SCHMIDT/Bochum
International Politics in Disarray, 1927—1932
- Wed., 15 February PROFESSOR SAUL FRIEDLÄNDER/Tel
Aviv
The Holocaust in Historiography
- Tues., 28 February DR. GERD KRUMEICH/Düsseldorf
Poincaré and the French Government in the
July Crisis of 1914
- Tues., 6 March PROFESSOR HEINZ DUCHARDT/Mainz
Empire, Emperor and Imperial Authority in
17th and 18th Century Europe

SUMMER TERM 1984

- Tuesday 8 May DR. LOTHAR KETTENACKER (London)
Hitler’s ‘Final Solution’ and its Rationalisation
- Tuesday 15 May PROFESSOR THEODOR SCHIEDER
(Cologne)
Das Problem historischer Größe : Friedrich II.
von Preußen
- Tuesday 29 May DR. IAN KERSHAW (Manchester)

- Thursday 7 June Dissent and Resistance in Nazi Germany
PROFESSOR GERHARD A. RITTER
(Munich)
Social Security in Germany and Britain. Its
Origins and Characteristics in Comparative
Perspective
- Tuesday 19 June PROFESSOR MICHAEL STÜRMER
(Erlangen)
Puritanism and Capitalism in the Eighteenth
Century: A Neuwied Family
- Thursday 28 June PROFESSOR ERNST NOLTE (Berlin)
Marxism, Fascism, Cold War. Some Remarks
on a Trilogy

AUTUMN TERM 1984

- Tuesday 23 October DR. CHRISTOPHBUCHHEIM (Munich)
German Exports of Manufactures to Great
Britain in the Second Half of the 19th Century:
Significance and Causes
- Tuesday 13 November Dr. CLEMENS A. WURM (Bochum)
International Cartels in British Politics during
the Interwar Period
- Tuesday 4 December PROFESSOR KLAUSBADE (Osnabrück)
Imperialism and Christian Missionaries. The
German Experience before World War I.
- Tuesday 11 December DR. JÜRGEN FÖRSTER (Freiburg)
The German Army and the Ideological Warfare
against the Soviet Union 1941

SPRING TERM 1985

- Tuesday 19 February PROFESSOR PETER-CHRISTIAN WITT
(Kassel/Oxford)
The German Mandarins 1871—1945: A Collec-
tive Biography

- Tuesday 5 March DR. WILHELM DEIST (Freiburg)
The Collapse of the German Army in 1918
- Tuesday 12 March PROFESSOR WOLFGANG REINHARD
(Augsburg)
New World and Old World: The Balance
Sheet of an Exchange. European Imperialism
and the Americas in the Early Modern period
- Tuesday 19 March PROFESSOR HANS-JÜRGEN SCHRÖDER
(Giessen)
Economic Aspects in National Socialist Foreign
Policy 1933—1939

Symposium

3 December 1982

European History with Comparative Interest

16 June, 1983

Karl Marx and World History

30 September and 1 October 1983

Alexander von Humboldt (1769—1859): Science in Britain and
Germany in his Time

8—10 December 1983

Martin Luther: Influence and Image in England and Germany

このシンポジウムは、ルター生誕 500 年を記念してのものであったが、同
時（8～23日まで）に Special Event として Exhibition: Martin Luther-
Reform and Reformation が開催された。

この紹介では、上記の内容にまで立ち入るスペースはないので、その一層の
イメージ・アップのための材料として、シンポジウムの中から一つ、カー
ル・マルクス死後100年記念の 'Karl Marx and World History' についての
プログラムを付け加えておく。

KARL MARX AND WORLD HISTORY

Public lecture

Shlomo Avineri (Jerusalem):

Karl Marx Idea of History : Aperspective

Followed by a panel discussion :

Chair :

Jomes Joll (London)

Panel :

Shlomo Avineri

Iring Fetscher (Frankfurt)

David McLellan (Canterbury)

Massimo Salvadori (Turin)

その上、コンファレンスが、イギリスかドイツのいずれかにおいて交代で定期的に開催される。これらの企ては、同じ分野で研究しているイギリスの研究者とドイツの研究者とを結びつけるためであり、また新しい方法の交換や最近の研究成果を促進するためのものである。近年のコンファレンスのテーマは次の如くである。

Conference

27—29 September 1982, at the Werner-Reimers-Stiftung, Bad Homburg
Imperialism after Empire

1—4 June 1983, at the GHI London

The Great Powers and Post-War Germany, 1945—1952

22—24 February 1984, at Gumberland Lodge, Windsor Great Park

Perception in History and Anthropology : the Problem of 'Otherness'

20—23 September 1984, at the GHI London

Max Weber and his Contemporaries

5—9 February 1985, at the Villa Borsig, Berlin-Tegel

The Berlin West Africa Conference 1884/85

以上のテーマの中で、Max Weber and his Contemporaries は、私が1982年の秋に所長モムゼン教授に伝えた私の研究テーマ（英文）の一つと全く一致するものであったので、参加することなく帰国することが心残りであった。しかし、LSEのラルフ・シュレーダー氏がその後ペーパー（38のケース・スタディが提出された）を送ってくれたので、他の機会にこのコンファレンスの紹

介を試みたいと考えている。ともあれ、このコンファレンスの規模と内容は日本の学会のそれに匹敵するものを持っている。シンポジュームの項と同じ理由で、この中から1983年のコンファレンスプログラムを記しておく。

PROGRAMM

The Great Powers and Post-War-Germany (1945—1952)

Deutschland in der Nachkriegspolitik der Alliierten

Wissenschaftliche Konferenz im Deutschen Historischen Institut 17,
Bloomsbury Square London vom 1.—4. Juni 1983

Mittwoch, 1. 6. 1983

- 17.00 Begrüßung im Institut
Eröffnung der Konferenz durch *Wolfgang J. Mommsen*
18.00 *Theodor ESCHENBURG* (Tübingen)
Deutschland in der Politik der Alliierten nach dem
Zweiten Weltkrieg
19.00 Empfang

Donnerstag, 2. 6. 1983

1. Sektion DIE DEUTSCHLANDPOLITISCHEN KONZEPTIONEN
DER SIEGERMÄCHTE (9.30—13.00)

CHAIR *John H. Backer* (Washington)
Dietrich GEYER (Tübingen)
Deutschland als Problem der sowjetischen Europapolitik
nach dem Zweiten Weltkrieg
John GIMBEL (Arcata)
The Army, the State Department and the Recovery of
Germany

- 11.30 Coffee break
Raimond POIDEVIN (Straßbourg)
La politique allemande de la France de 1945 à 1952

13.00 Lunch

1. Sektion, 2. Teil (15.30—18.00)

CHAIR *Antony POLONSKY* (London)

Victor ROTHWELL (Edinburgh)

Great Britain, Germany and the Coming of the Cold war

16.30 Tea break

Lothar KETTENACKER (London)

Die Planungen der Alliierten für die Kontrolle Deutschlands-ein Vergleich

Freitag, 3. 6. 1983

2. Sektion PROBLEME DER ALLIIERTEN BESATZUNGSPOLITIK (9.30—13.00)

CHAIR *Jacques BARIETY* (Paris)

Josef FOSCHEPOTH (London)

Konflikte in der alliierten Reparationspolitik

John Edgar FARQUHARSON (Bradford)

The Management of Food and Agriculture in Occupied Germany 1945—1948

11.30 Coffee break

Alan S. MILWARD (Manchester)

France and the Ruhr, 1945—1949. French Reactions to Allied Policy in Germany

13.00 Lunch

2. Sektion, 2. Teil (15.00—18.30)

CHAIR *Peter HÜTTENBERGER* (Düsseldorf)

Dieter STARITZ (Mannheim)

Konflikt im Kontrollrat-das Scheitern gesamtdeutscher Parteibildungen 1946/47

16.00 Tea break

Michael B. BELL (Birmingham)

The Berlin Blockade in Anglo-American-Soviet Diplomacy

Horst LADEMACHER (Kassel)

Das Petersberger Abkommen vom 22. 11. 1949

Samstag, 4. 6. 1983

3. Sektion DEUTSCHLAND IM OST-WEST-KONFLIKT (9.30—

- 13.00)
 CHAIR *David CHILDS* (Nottingham)
Manfred OVERESCH (Hildesheim)
 Die Haltung der Deutschen zur Frage der Teilung
 Deutschlands
Martin McCAULEY (London)
 German Politics under Soviet Occupation
- 11.30 Coffee break
Rolf STEININGER (Innsbruck)
 Die sowjetische Deutschlandinitiative von 1952 eine ver-
 paßte Chance?
- 13.00 Lunch
3. Sektion, 2. Teil (15.00—19.00)
 CHAIR *Lutz NIETHAMMER* (Hagen)
Norbert WIGGERSHAUS (Freiburg)
 Effizienz und Kontrolle. Zum Problem einer militärischen
 Integration Westdeutschlands 1948—1952
- 16.00 Tea break
Wilfried LOTH (Saarbrücken)
 Die Auswirkungen des Koreakrieges auf Deutschland
Roger MORGAN (London)
 Germany's Decision for the West, 1945—1952 and its
 Implications for East-West Relations
Wolfgang J. MOMMSEN (London)
 Anmerkungen zu Verlauf und Ergebnissen der Konferenz

さらに、毎年限られた数であるが、スカラシップがイギリス史およびドイツ史を研究する Ph. D. students の在外での研究に対して与えられる。私が知り合いになったドイツ人の研究者は、このスカラシップで武器の発達という視点からの戦争史の研究に従事していた。所長およびスタッフは喜んでドイツ史およびドイツの研究施設についてのどんな質問にも答えるだろう。訪問者はいつでも歓迎される。セミナー、講演等の情報および所長との面会について

は、秘書の Mrs. Jill Williams Tel: 01-401-5486 にどうぞ連絡をとって下さい。

GHI London の図書館は、特別な紹介も必要なく、誰にでも開放されている（月・木 10.00—20.00、火・水・金 10.00—17.00、開館）。沢山のイギリス史およびドイツ史に関する雑誌と並んで、今日のイギリスおよびドイツの日刊紙も利用できる。1984年1月刊行の *Periodicals Yearbooks* によれば雑誌関係は、247を数える。レファレンス・ブックと最近出版されたドイツ史（特に19～20世紀に重点をおく）の研究に特別な注意が払われている。収書状況は、未だ完成の域からは遠く離れているが、ドイツ史に関心をもつすべての人々に比較的良い研究施設を提供している。

すべての本は、2階の閲覧室で調べることができる。本のリストは、アルファベット順と項目別の2様のカタログになっている。マイクロ・リーダーとコピーの施設がある。この図書館はまだ図書館相互の貸出制度にリンクされていない点を付け加えておかなければならない。しかしながら、特に要望のある本については、刊行中のものであれば、注文し、それ相応の短い時間で利用に供されうる。

刊行物

GHI London は、主としてイギリス史および英独関係の諸問題に向けられた、研究所独自の一連の出版物——Klett-Cotta 社（Stuttgart）刊——をもっている。研究所は、また所報 *Bulletin* を年3回発行している。それには、研究所の活動についての情報や図書館で利用できるドイツ史に関する最近の出版物のサーヴェイが含まれる。その主たる特徴は、特に関心をひくドイツ史に関する新しい出版物の書評にある。ブリティンは、同学の士にとってきわめて有用なものである。求めれば無料で入手できる。毎年秋に行われ、その研究所によって刊行される年次講演 *Annual Lecture* についても同様である。ブリティンは現在18号を数えるが、それ以外の刊行物は以下の通りである。

PUBLICATIONS OF THE GERMAN
HISTORICAL INSTITUTE LONDON

- Vol. 1: Wilhelm Lenz (ed.), *Archivalische Quellen zur deutsch-britischen Geschichte seit 1500 in Großbritannien*
Manuscript Sources for the History of Germany since 1500 in Great Britain (Boppard a. Rh., Boldt, 1975)
- Vol. 2: Lothar Kettendacker (ed.), *Das "Andere Deutschland" im Zweiten Weltkrieg*
(Stuttgart, Klett, 1977)
- Vol. 3: Marie-Luise Recker, *England und der Donauraum, 1919–29. Probleme einer europäischen Nachkriegsordnung*
(Stuttgart, Klett, 1976)
- Vol. 4: Paul Kluge and Peter Alter (eds), *Aspekte der deutsch-britischen Beziehungen im Laufe der Jahrhundere*
Aspects of Anglo-German Relations through the Centuries
(Stuttgart, Klett-Cotta, 1978)
- Vol. 5: Wolfgang J. Mommsen, Peter Alter, Robert W. Scribner (eds), *Stadtbürgertum und Adel in der Reformation. Studien zur Sozialgeschichte der Reformation in England und Deutschland*
The Urban Classes, the Nobility and the Reformation. Studies on the Social History of the Reformation in England and Germany
(Stuttgart, Klett-Cotta, 1979)
- Vol. 6: Hans-Christoph Junge, *Flottenpolitik und Revolution. Die Entstehung der englischen Seemacht während der Herrschaft Cromwells* (Stuttgart, Klett-Cotta, 1980)
- Vol. 7: Milan Hauner, *India in Axis Strategy. Germany, Japan, and Indian Nationalists in the Second World War*
(Stuttgart, Klett-Cotta, 1981)
- Vol. 8: Gerhard Hirschfeld and Lothar Kettenacker (eds), *Der "Führerstaat": Mythos und Realität*
The "Führer State": Myth and Reality
(Stuttgart, Klett-Cotta, 1981)
- Vol. 9: Hans-Eberhard Hilpert, *Kaiser- und Papstbriefe in der*

Chronica majora des Matthaeus Paris

(Stuttgart, Klett-Cotta, 1981)

- Vol. 10: Gerhard Hirschfeld and Wolfgang J. Mommsen (eds), *Sozialprotest, Gewalt, Terror. Gewaltanwendung durch politische und gesellschaftliche Randgruppen im 19. und 20. Jahrhundert*

(Stuttgart, Klett-Cotta, 1982)

- Vol. 11: Wolfgang Mock and Wolfgang J. Mommsen (eds), *Die Entstehung des Wohlfahrtsstaates in Großbritannien und Deutschland 1850-1950*

(Stuttgart, Klett-Cotta, 1982)

- Vol. 12: Peter Alter, *Wissenschaft, Staat, Mäzene. Anfänge moderner Wissenschaftspolitik in Großbritannien*

(Stuttgart, Klett-Cotta, 1982)

- Vol. 13: Wolfgang Mock, *Imperiale Herrschaft und nationales Interesse. 'Constructive Imperialism' oder Freihandel in Großbritannien vor dem Ersten Weltkrieg*

(Stuttgart, Klett-Cotta, 1982)

- Vol. 14: Gerhard Hirschfeld (ed.), *Exil in Großbritannien, 1933-1945*

(Stuttgart, Klett-Cotta, 1982)

- Vol. 15: Wolfgang J. Mommsen and Hans-Gerhard Husung (eds), *Auf dem Wege zur Massengewerkschaft. Die Entwicklung der Gewerkschaften in Deutschland und Großbritannien 1880-1914*

(Stuttgart, Klett-Cotta, 1984)

House Publications of the German Historical Institute London

Lothar Kettenacker and Wolfgang J. Mommsen (eds), 'Research on British History in the Federal Republic of Germany 1978-1983' (London, 1983).

Wolfgang J. Mommsen, 'Two Centuries of Anglo-German Relations. A Reappraisal' (London, 1984).

Annual Lectures:

Samuel Berrick Saul, 'Industrialisation and De-Industrialisation? The Interaction of the German and British Economies before the First World War', 1979 Annual Lecture of the GHIL (London, 1980).

Karl Dietrich Erdmann, 'Gustav Stresemann: The Revision of Versailles and the Weimar Parliamentary System', 1980 Annual Lecture of the GHIL (London, 1981).

A. J. P. Taylor, '1939 Revisited', 1981 Annual Lecture of the GHIL (London, 1982).

Gordon A. Graig, 'Germany and the West: The Ambivalent Relationship', 1982 Annual Lecture of the GHIL (London, 1983).

Wolfram Fischer, 'Germany in the World Economy during the Nineteenth Century', 1983 Annual Lecture of the GHIL (London, 1984).

English Publications of the German Historical Institute London

Wolfgang J. Mommsen in collaboration with Wolfgang Mock (eds), *The Emergence of the Welfare State in Britain and Germany*, London, Croom Helm 1981.

Wolfgang J. Mommsen and Gerhard Hirschfeld (eds), *Social Protest, Violence and Terror in Nineteenth- and Twentieth-Century Europe*, London, Macmillan 1982.

Wolfgang J. Mommsen and Lothar Ketteracker (eds), *The Fascist Challenge and the Policy of Appeasement*, London, Allen & Unwin 1983.

Gerhard Hirschfeld (ed.) *Exile in Great Britain. Refugees from Hitler's Germany*, Leamington Spa, Berg Publishers 1984.

Kaspar von Greyerz (ed.), *Religion, Politics and Social Protest. Three Studies on Early Modern Germany*, London, Allen & Unwin 1984.

Kaspar von Greyerz (ed.), *Religion and Society in Early Modern Europe 1500-1800*, London, Allen & Unwin 1985.

Outside the Publication Series:

Wolfgang J. Mommsen (ed.), *Die Organisierung des Friedens: Demobilisierung 1918-1920*, Sonderheft von: *Geschichte und Gesellschaft*.

schaft 1983/2.

ともあれ、以上の簡単な外見的な紹介からでも察しられるように、モムゼン所長の下、研究所は着実に整備され、精力的な活動を続けている。これは、まぎれもなくドイツの今日の文化政策あるいは国際文化交流事業の一具体例である。昨年6月4日の D-Day 40周年記念日を頂点とする凄まじいほどのキャンペーンを目の当たりにして、ヨーロッパでのドイツの孤立というか居場所のなさについて思い巡らしたのもこの研究所においてであった。と同時に、教科書問題を契機にアジアにおける日本について思わずにいらなかったのも事実である。正直に言って、損害を与えた側が、損害を受けた側が今なお鮮明に記憶している歴史的事実を忘れるのは、どうみても拙いというのがその時の私の実感であった。国際交流というのは、つまるところ、それぞれの抱く歴史意識の水準に相応するのではないか。冒頭に引いたエコノミスト誌は、この研究所に関係するイギリスの学者たちは、いささか気まずい思いをしていることを紹介しながら、サッチャー政府の文化・学術援助に対する姿勢を批判しつつ、そして、また、この研究所のイギリス史に関する研究を「イギリスについてのもう一つの見方」と評価しつつ、次のように結んでいる。「昨年12月の『第2ドイツ大使館』開館式で、連邦研究科学大臣ハインツ・リーゼンフーバ博士は、『われわれは自分の隣人、パートナー および 同盟者の歴史を知ることは、絶対に必要なこと』であると宣言し、さらに人文関係の研究に『最大可能な援助』を約束した。そして、彼は主張した。過去についての知識は、『われわれ二つの社会の未来の形成にとって必要欠くべからざるもの』である、と。全くその通りである。」